女性視点で貫いた「和モダン」の装い

⑰ 坂根Mクリニック（茨城県つくば市）

つくば市の住宅地で患者を待ち続ける建物。随所に配された「格子」は和の象徴的なアイテム

まず誘われた場所はトイレだった。

「トイレに力を入れているかどうかは女性がその場を評価する判断基準です」（坂根みち子院長）。

「ホテルみたいなトイレ」には訪れる患者や家族から賛嘆の声が今も巻き上がっている。

2010年の開院直前まで、当時の勤務先である病院の仕事を全うしながら準備に奮闘した。建物全体のイメージから、いすの仕様、壁紙まで。クリニックの全てを考え、決めたのは坂根氏だ。

基調となるテーマは「和モダン」。発想の原点は茨城県つくば市の土地柄にある。研究学園都市を構成する新しい市民と、父祖の時代から住み続ける人々。双方の融合で地域が譲成されてきた。和モダンは新旧両方の住民に優しい造りである。建材は地元産を取り入れている。

ラフな設計を3社に依頼。最も肌合いが近い業者とタッグを組んだ。坂根氏のプランは勤務医としてのキャリアに加え、女性ならではの視点に裏打ちされたもの。「男性の論理」で染められがちな従来の開業案とは一味も二味も異なるものだ。

「優先順位がどうも私とは違うんです（苦笑）。反対する声とは戦ってきました。私は自分の感覚を信じている。私の感覚は主婦であり、一人の生活者であることが基本。医療界では異端であっても、患者さんにはむしろ近い」（坂根氏）

待合室。左手の大黒柱はケヤキ。
梁は解体した古民家の材料を再利用した。
いすの素材も坂根氏自ら選んでいる

受付。
ホテルのコンシェルジュをイメージ。
いすの高さにもこだわった。
背後には女性医師の人形が並ぶ

女子トイレ。ボウルに花をあしらっている。
利用した女性患者は異口同音に「感動しました」

2階ミーティングルーム。卵形のテーブルで楽しさを演出。
窓からは筑波山を臨める。スクリーンや大画面テレビも設置可能

点滴ルーム。
庭の植物を窓から鑑賞できる。
夜間は室外の照明でライトアップ

坂根氏の診察室。赤が基調。テーブルの曲線は独自に算出。
いすは長時間座っても疲れない機能を重視

坂根氏の創意が詰まった設えは患者にも変化を促す力があった。何度か通ううちに仲良くなった患者の何人かは自作の絵やオブジェ、木の実などを持ってきてくれた。患者の「参加」でクリニックは血の通う地域コミュニティーとなる。

高い天井が印象的。南向きの広い屋根には太陽電池を載せられる材を使っている。近い将来、コストに見合う製品が出た段階で実現する予定だ。

待合室には靴のまま入る。だが、床暖房。これも当初は「土足で床暖房なんて」と反対された。だが、足元からじんわり温まる感覚は何物にも代え難い。スリッパは不潔だし、履物を替える動作を高齢者に強いるわけにはいかない。坂根氏はこの点でも最後まで譲ることはなかった。

「男には気が付かない」視点。医療界には意外に多いようだ。例えば、「動線は時間管理に直結する。重視しました」という哲学。坂根Mクリニックはありきたりを避け、経験と直感を重視してきた。ここにしかない居心地が結実している。